

リヒャルト・シュトラウス

死と変容

チャイコフスキー

交響曲第五番

宮前フィルハーモニー交響楽団
第38回定期演奏会

2014年12月7日(日)
多摩市民館大ホール
指揮:河地良智

演奏曲目

リヒャルト・シュトラウス作曲
交響詩「死と変容」

休憩 Intermission

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー作曲
交響曲第五番

●指揮

河地良智

●演奏

宮前フィルハーモニー交響楽団

「その病人はベッドで重く、不規則な息を繰り返しながら、まどろみのなかにいる。暖かい夢が魔法のように、苦悩の顔に微笑みを浮かべさせる。眠りは安らかなもの

「死と浄化」とも呼ばれるこの曲は、芸術家の死の瞬間を交響詩に表現しようという作曲家自身のアイデアから生まれました。これが作曲家本人による曲の草案となったものです。

交響詩 死と変容



リヒャルト・シュトラウス

になる。病人は意識を取り戻す。すると恐ろしい痛みが再び襲い始め、高熱にその手足は震える。発作が過ぎ去り、痛みが静まると、病人は過ぎ去った日々思いを馳せる。少年時代、苦闘と情熱の青年時代、そして再び痛みが襲い始める頃、病人の心に人生の成果、思想、そして実現しようとした、つまり芸術として表現しようとした理想が浮かぶ。しかしそれは、人間によつては到達することのできないものであるが故に、ついには完成させることのできなかつたものであった。死の瞬間が近付き、魂は肉体を離れて、この世では満たすことのできないものを、永遠の世界のなかで美しい姿のうちに完成させるのである。」

これらの場面を想って聴くと、曲を何倍も楽しめるでしょう。イメージしてみてください。私室のベッドにいる、とある芸術家の不規則で、か細い呼吸の音にも聴こえる「死の動機」から、曲は始まります。

創作の特徴は、葛藤や苦悩の痕跡がないこと。ベートーヴェンのように、頭をかきむしりながら作曲する人ではなく、「頼まれれば淡々と何でも作曲する勤勉な職人」でした。芸術家の狂気や、ベートーヴェンやチャイコフスキーのような苦悩や絶望もない。バッハのように、「平静に、規則正しく」作曲をしていました。また、ベートーヴェンやマーラーのように、譜面を書いている消すような格闘の痕跡もなく、頭の中にできているものを書き写す作業が、彼にとつての楽譜を書くということだったのでした。「物事をすべて音に変えてしまふ」作曲家だともいわれています。

彼の父は有名なホルン奏者でした。そのため彼も、子どもの頃から、音楽や楽器を知る機会が日常的にありました。おかげで、演奏者よりも楽器の特性を熟知していたといえます。楽器の特性を効果的に活かし、「シュトラウス・サウンド」を実現しているのです。

ベートーヴェンの音楽

ナチスとの関係 政治的圧力

ナチス政権に請われて第三帝国音楽総裁に就任。当時は、ユダヤ人音楽家の作品は禁止されており、ユダヤ系のメンデルスゾーン作曲「真夏の夜の夢」に代わる同名の作品をつくるよう要請されるなどした彼は、当局に反発。そのため、総裁職を解任され、彼の多くの作品は一時上演禁止になりました。戦後も、ナチスに協力していたと見なされ、戦犯裁判にかけられています。

日本との関係 歌舞伎座での初演

1940年、日本の初代天皇である神武天皇の即位から2600年(西暦1940年)を祝うために、日本政府から依頼されて「皇紀2600年祝典曲」を作曲しています。初演は東京歌舞伎座にて、170人の大編成オーケストラに加え、寺の鐘が14個使用されました。他に5か国5人の作曲家に依頼されましたが、アメリカは当時の対日関係悪化のために実現しませんでした。そういう時代です。

南ドイツ
ガルミッシュ近郊
R・シュトラウス宅
の前にて。
中央は河地良智
先生。
お写真は河地先生に
ご提供いただきました。



リヒャルト・シュトラウス宅



背景にはアルプス山脈を彷彿とさせる風景が見える。南ドイツガルミッシュのR・シュトラウス宅
お写真は河地先生にご提供いただきました。

ホルン×ビール リヒャルト・シュトラウス

1864~1949年 ドイツ出身
父は、ミュンヘン宮廷管弦楽団の首席ホルン奏者であり、王立音楽院の教授であった。母はプショール醸造所という有名なビール醸造所の娘だった。父の影響を受け、5歳のときから音楽の教育を受けた。やがて、自身も30代で、父がいたミュンヘン宮廷管弦楽団の首席指揮者を務めることになるのです。

フランツ・ヨーゼフ・ シュトラウスという生き方

父、フランツ・ヨーゼフ・シュトラウスとワーグナーは犬猿の仲。ワーグナーの新しい音楽を父は評価しなかった。しかし、ワーグナーの曲のホルンのソロを、父ほど完璧に吹けるホルン奏者はおらず、二人はお互いの才能は認め合っていました。ワーグナーが亡くなった翌日、オーケストラに彼の死が告げられ、全員が亡き巨匠をしのんで起立しましたが、父だけは頑として座ったままでした。頑固を通してきた彼なりの送り出し方だったのかもしれない。

よりもよって なぜふたりのリヒャルト

父は新しい音楽をつくるワーグナーを全く評価しなかったにも関わらず、息子にリヒャルトと名前をつけました。ワーグナーの名前はリヒャルト。大嫌いな男の名前をつけているのです。なお、息子リヒャルトは、古典主義を是とする父から音楽を学びましたが、のちに、父の思惑とは裏腹に、ワーグナーに傾倒してゆき、ワーグナーの音楽を踏襲する存在までになるのです。ますます、父の命名が意味深長に思えてなりません。

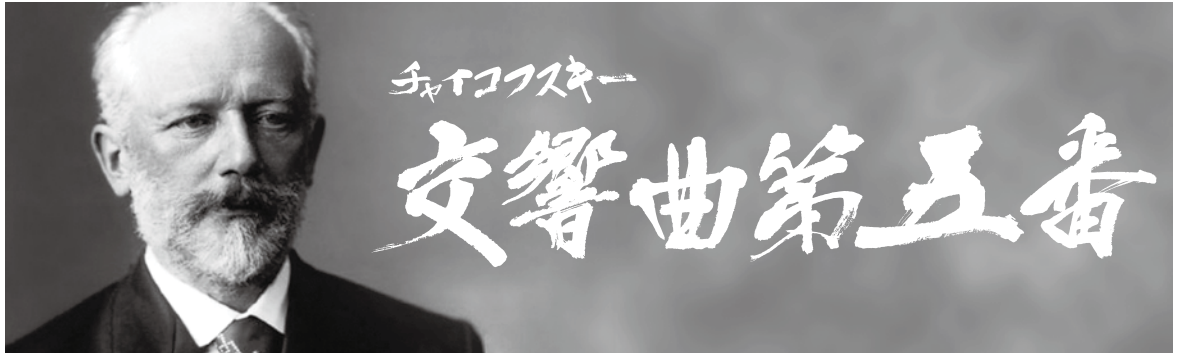
同い年の人々。

ヨハン・ハルヴオルセン(作曲家指揮者)
二葉亭四迷(小説家)
マックス・ウェーバー(社会学者)
アロイス・アルツハイマー(医学者精神科医)
アンリ・ド・トゥールーズ・ロートレック(画家)
津田梅子(教育者)



| | | 1600 | 1650 | 1700 | 1750 | 1800 | 1850 | 1900 | 1950 |
|-------------|--------|------|-----------|-----------|-----------|-----------|------|------|------|
| J.S.バッハ | ドイツ | | 1685~1750 | | | | | | |
| ハイドン | オーストリア | | | 1732~1809 | | | | | |
| モーツァルト | オーストリア | | | | 1756~91 | | | | |
| ベートーヴェン | ドイツ | | | | 1770~1827 | | | | |
| ショパン | ポーランド | | | | | 1810~49 | | | |
| シューマン | ドイツ | | | | | 1810~56 | | | |
| リスト | ドイツ | | | | | 1811~86 | | | |
| ワーグナー | ドイツ | | | | | 1813~83 | | | |
| J.シュトラウスII世 | オーストリア | | | | | 1825~99 | | | |
| ブラームス | ドイツ | | | | | 1833~97 | | | |
| チャイコフスキー | ロシア | | | | | 1840~93 | | | |
| ドヴォルザーク | チェコ | | | | | 1841~1904 | | | |
| マーラー | オーストリア | | | | | 1860~1911 | | | |
| ドビュッシー | フランス | | | | | 1862~1918 | | | |
| R.シュトラウス | ドイツ | | | | | 1864~1949 | | | |
| シベリウス | フィンランド | | | | | 1865~1957 | | | |
| ラフマニノフ | ロシア | | | | | 1873~1943 | | | |
| ラヴェル | フランス | | | | | 1875~1937 | | | |

売れっ子たちの
生きた時代を
比べてみよう。



1888年は、この曲が作曲、初演された年です。その年にチャイコフスキーは、親友コンスタンチン大公への手紙にこう書いています。

「私は音楽における形式を把握し、操作することに對する自分の非力に、生涯悩まされてきました。私はこの生来の弱点を克服するために努力しましたし、かなり成果をあげたことを誇りをもつていうことができます。しかし私は形式において真に完全なものを作ることなく墓場に行くことになるでしょう。私の書くものは常に蛇足の集積であり、有識者が見れば、すぐにカラクリはわかってしまうでしょうが、私はそれをどうすることもできません。」

チャイコフスキーという大作曲家ですが、こんなにも思い悩んでいるのです。たしかに、どの写真も苦悩しているように見えます。ペートーヴェンという越えられない絶対的な存在があり、比べてチャイコフスキーの交響曲が構造的な形式性に欠けると言われ、そのことに彼自身も悩んでいました。初演は大成功だったにも関わらず、大げさに飾られた、こしらえものの不誠実とまで自身の作品を酷評。自信がもてずに世間の評価にさらされる一人の作曲家の苦悩が見られます。

作曲家本人によると、第一楽章の序奏部には、「運命、または神の摂理の探求しがたい設計といったもの」にたいする完全な服従を描こうとしたといいます。それを演出する、ロシア的なセンチメンタリズムにあふれる旋律こそが、彼の音楽の魅力であり、同時に欠点と言

われるところ。しかし、そのセンチメンタリズムに浸かると、この曲にファンが多く、ダンツの支持を得ている所以が分かるでしょう。

1 楽章

「運命」を表す冒頭のクラリネットの暗い旋律で幕を開けます。ファゴット、フルートと加わり、徐々に曲は盛り上がってゆきま

2 楽章

特に味わってもらいたいのがこの2楽章冒頭、ピアノ、チェロ、コントラバスによる和音の移り変わり、それに第2ヴァイオリンが加わってゆき… 本当に美しい場面です。こんなに美しいのに、これは伴奏、そしてまだ冒頭に過ぎないので。弦楽器が一つの頂点をむかえたのち、至福のホルンのソロが始まります。

3 楽章

一転して、少し控えめなワルツが始まります。4つの楽章のなかで少し、軽い気分になれる存在です。

4 楽章

4楽章が始まると、この冒頭のために3楽章があったのかと思われるほど、圧倒的な冒頭、弦楽器の聴かせどころ。堂々と、朗々と歌います。苦悩に打ち克った喜びと自信に満ち溢れています。

運命の動機

交響曲第5番といえば、ベートーヴェンの「運命」が有名ですが、実はこの曲も運命がテーマ。ベートーヴェンを意識したのではと言われています。1楽章の冒頭、クラリネットが2本で奏で始めるメロディが「運命の動機」というわけですが、では、2曲の運命の動機を聴き比べてみましょう。



タタタ・ター

ベートーヴェン作曲
交響曲第5番

タータタ・
タータタ・
ター・ター

チャイコフスキー作曲
交響曲第5番



つまり彼は、「タタタ・ター」にリズムを付けたのでは、ということなんです。さらに、曲の後半になると、ベートーヴェンの運命の動機が直接奏されます。

まず、2楽章後半、チャイコフスキーの運命の動機が高まる前に、トランペットが繰り返します。さらに、曲が幕を閉じる最後の音が、「タタタ・ター」そのものなのです。ぜひ聴いてみてください。

規則正しく 自分に厳しく

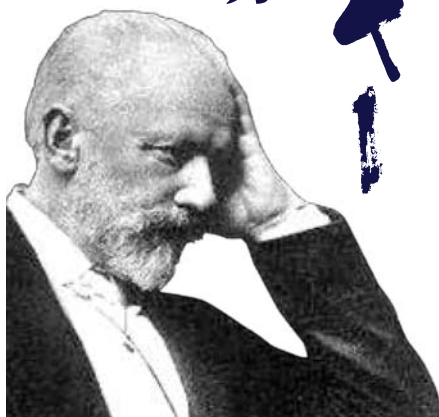
性格は善良で温和。身なりは優美でスマート。仕事をする時間は10～13時、17～20時と規則正しく自分に厳しい人でした。「真に誠実な芸術家であれば、気分が乗らないからといって腕をこまねいていることはできません。気分が乗るのを待つだけで、自分でその気になると努めなければ、すぐに怠惰と無気力に陥ってしまうでしょう。耐えて信じることです。みずから気分を高めることができた者には必ずインスピレーションが現れます」

交響曲第5番、 成功とは裏腹に

交響曲第5番の初演は彼自身の指揮で演奏され、大成功をおさめました。実は彼は、この曲をあまり好んでいなく、批評家の評判も良くなかったのです。彼は手紙に書いています。「あのなかにはなにかイヤなものがあります。大げさに飾った色彩があります。人々が本能的に感じるようなこしらえもの的な不誠実さがあります」

死因の謎 様々な説、噂

交響曲第6番「悲愴」を自身の指揮で初演した9日後に急死。生水を飲んで、当時流行していたコレラに罹ったため死亡したと見られていますが、一方で、とある侯爵の甥と深い仲になったことが発覚したために、自殺を強要されたのではないかと、あるいは毒を盛られたのではないかと、という説もあるのです。



という生き方

チャイコフスキー

ピョートル・イリイチ・ チャイコフスキー

1840～1893年 ロシア出身
音楽には関係のない家柄に育ち、10歳で法律の名門校に入学。学校は、同性愛の雰囲気に満ちており、チャイコフスキーも影響を受けています。

やがて私は 音楽家になるような気がする

19歳で法務省に入省。音楽は趣味でしたが、法律学校時代、友人への手紙で「やがて私は音楽家になるような気がする」と告げていました。就職したものの、当時のロシアの官僚の世界は、汚職と買収が横行し、誠実な彼は気を病んでしまいます。そこで助けとなったのは音楽だったのでした。職を辞し、ペテルブルク音楽院で学び始めるのです。

音楽性が、永遠に 死滅してしまったように

結婚生活の破綻について、彼は手紙に書いています。「式が終わるとすぐ、そして、妻と二人だけになったことに気づくとすぐ、今やわれわれは互いに別れることなく生活する運命にあるのだということを意識して、…私にとって憎悪すべきものであることに、私は突然気づいたのです。私が、あるいは、少なくとも私の唯一とさえいえるよい部分、つまり、音楽性が、永遠に死滅してしまったように私には思えたのです。」

短い結婚生活 自殺未遂

ペテルブルク音楽院を卒業後、モスクワ音楽院の教師となります。そこで、生徒からアプローチされたのです。「あなたの恋に自殺したいほどです。すぐにでもおいでください。」熱烈なアプローチから約2ヶ月で結婚しましたが、結婚生活のストレスで神経衰弱に。モスクワ河に入水自殺を図ります。結局、別居。それ以後、生涯妻の顔を見ることはありませんでした。



チャイコフスキーに猛烈アピールし、短い結婚生活を送ったのはこの女性。アントニーナ・イヴァーノヴナ・ミリュコーヴァ。離婚は成立せず、戸籍上はずっと夫婦でした。

ロシア音楽から西欧派へ。

チャイコフスキーが音楽を学んだペテルブルク音楽院は、ロシア音楽の水準をヨーロッパ音楽に近づけることを目標としていました。彼はその音楽院の第一期生。非常に優秀な成績で卒業しましたから、大きな期待がかかっていた。彼と同時期に、ロシアには「五人組」と呼ばれる5人の作曲家―バラキレフ、キュイ、ムソルグスキー、ボロディン、リムスキー＝コルサコフ―が活躍していました。ロシアの民族主義的な音楽を！と謳った国民楽派の作曲家たちです。チャイコフスキー自身も、民謡的な旋律を使うことが、ロシアの交響曲の条件だと考えており、五人組も彼のことを仲間と考えていました。しかし、結婚生活が約2か月で破綻したのちは、西ヨーロッパでの暮らしが増え、ヨーロッパ的な音楽となっていくます。西欧に傾倒し、彼の後期の交響曲、4番、5番、6番は生まれたのです。

指揮者インタビュー

◆今年が生誕150周年だからぜひと、初めてリヒャルト・シュトラウスを選曲しました。

◇今回リヒャルト・シュトラウスが初めてということだが、オーケストラの活動は、基本的に新しいこととの連なりなのです。作曲家たちは作品を大変多く書いており、一人の作曲家であっても全て網羅できるわけではない。何百年という歴史を演奏するということは、

そういうことなのです。そしてお客さまに新しい世界、発見、感動に興味関心をもってもらうことが私たちの役目であり、本質的には今回もその一環。伝える役割があることを忘れてはいけない。

私たちはお客様に聴かせる、それも作曲されたものを再現する立場にあります。だから勉強とトレーニングは欠かしてはいけません。たとえば、ドの音にも様々ありません。チャイコフスキーのド、シュトラウスのド。それを意識し、理解した途端に世界が開けるよ。練習が変わってくる。そのために、ぜひ新しい曲やジャンルに挑戦してほしい。例えば合唱曲やオペラ。言葉やドラマのあるものは表現力がつきますから。その意味で、具体的なイメージを音にする交響詩に取り組む意義は大きいのです。ここから選曲の幅が広がると思います。

◆先生はかつて、ヨーロッパでオペラの勉強をされていましたね。

◇その当時は、バイエルン国立歌劇場で勉強

していたので、シュトラウスの生まれたミュンヘンの近くに住んでいましたよ。今年の夏ももう一度見たいと思って、行ってきました。(P2写真参照)



◆そういうところで何を感じるのですか？

◇確認するという感じがな。留学してから長く経って、様々な音楽や人生を経験した僕の中に、シュトラウス像と、彼の音楽のつくりや音、音の重なりなどに対する考えができてきました。その、長年かけて自分のなかに築いたものを、再度行って確認するのです。

彼は、南ドイツにあるガルミッシュという土地に住んでいました。すぐ南にはアルプスがあります。そこで彼の作品の多くは生まれたのです。まさにそこにある自然そのものを音にしたのだな、とその土地に行くと感じることができるとです。シュトラウスは外国の人



で、自分と距離感があるからこそ、自分の想像を確認する意味で、彼の住んでいた土地へ行く

ハーピストプロフィール



山口裕子

東京生れ。3才半より桐朋学園子供のための音楽教室にて音楽教育、ピアノを始める。

田園調布雙葉学園(幼・小・中)より桐朋学園女子高等学校音楽科へ進む。

ハープをヨゼフ・モルナル氏に、指揮法・演奏解釈を故斎藤秀雄氏に師事。

オランダ国際ハープウィークにて演奏。1974年スイス・ジュネーブ国際音楽コンクール入選。

桐朋学園大学ディプロマコースを経て、新日本フィルハーモニー交響楽団に入団。以後12年間首席奏者を務める。

1977年フランス第一回マリイ・アントワネット・カザラ国際ハーブコンクール第4位入賞。

1997年より8年間桐朋学園大学音楽学部の講師を務める。

現在、イルミナートフィルハーモニーオーケストラ

ラ首席ハーブ奏者。

ソロ及び室内演奏活動の他、国内主要オーケストラ及び外来オーケストラのエキストラ奏者として活躍中。

日本ハーブ協会理事。有限会社アルページユ音楽事務所取締役。

共著に『オーケストラの秘密』(学研)、『バレエの秘密』



小野愛子

東京都出身。6歳よりドイツにてムンケル・レーマン女史にハーブの手ほどきを受ける。

帰国後、10歳よりハーブを山口裕子女史に師事。

2009年3月桐朋学園大学ハーブ科卒業。

2011年同大学研究科修了。

これまでに、ヨゼフモルナル、篠崎史子、井上美江子、西郷厚子の各氏に師事。

現在、ソロ、室内楽、オーケストラで活躍中。銀座十字屋ハーブ講師

第12回大阪国際音楽コンクール第3位受賞。

のです。このような土地で作曲した、このような景色を見て想像力を働かせた、ということを行くと確かめることができる。土地や風景と、作曲家の想像力は直結しているのですから。



◆だからでしょうか、彼の音楽の色彩感をもっと出そうと、先生がおっしゃっていたことが印象に残りました。

◇色彩感とは音楽のなかで変わります。

ハーモニイや楽器の組み合わせ、楽器の音量バランスによって変わります。それぞれの楽器をどのように活かして色彩感を出すか、ひたすらスコアを見てじつと考えるのです。おそらくシユトラウスは「じつやりたいのだな」と想像するのです。土地や風景を見て理解出来る程、単純ではないけれど、見なくては分からないよね。得るものがあるなら何でもやる。人と違うこともやってみる。人と違う感覚などは、人よりも多く持たなければいけないのですから。

音楽をやるにあたって、大事なことは興味と想像力をもつこと。知らないことは知ればいいし、トレーニングは繰り返せばいい。だけど興味と想像力は心がけないとできないのです。想像力は、音楽以外の経験からも、生まれるものだから、何にでも興味をもつことだね。そうしたら想像力は無限だよ。年齢を経る、経験するということは素晴らしいよ。私は何十年もかけて多く

のことを覚えてきましたので、その点についてだけは、何も分かっていなかった20代には戻りたくないと思っている。だから今の年齢で、あと5年くらい生きていきたいと思っこともありません。残念ながらそれは難しいけれどね。それでも興味と想像力を養うために様々な経験することです。



プロフィール
指揮 ◎ 河地 良智

桐朋学園大学指揮科に学び、斎藤秀雄、秋山和慶の両氏に師事。1973年、第3回民音指揮コンクール（現東京国際指揮コンクール）で奨励賞受賞。二期会オペラやN響定期公演などで、W・サヴァリツシユ氏、O・スウィトナー氏等の副指揮者を務める。

1983年より文化庁海外派遣員としてドイツ・ハイエルン国立歌劇場でW・サヴァリツシユ氏、ミラノ・スカラ座でG・パタネ氏、バイロイト祝祭歌劇場でW・ワーグナー氏に、また、プラハ国立歌劇場でZ・コシユラー氏等について積極的に歌劇場での研鑽を積む。それから現在まで、国内外の数多くの公演でオペラ、オペラストラを指揮し、それらの貢献により、北京市日中交流センター、オーストリア・ブルゲンランド州、また、諫早市より文化特別賞等を受ける。洗足学園音楽大学教授・学部長、及び同大学院音楽研究科長を経て、2011年4月より副学長に就任し、後進の指導にあたっている。

宮前フィルのホームページ

団員募集や演奏会情報など、随時更新しておりますので、ぜひご覧ください。

<http://miyamae-phil.jimdo.com/>

宮前フィルのフェイスブック

演奏会を作るまでの過程を、私たち宮前フィルが感じた楽しさ・苦しさを含めてお伝えしています。演奏会とともに楽しみください。「いいね！」してくださったら嬉しいです。

<https://www.facebook.com/miyamaephil>

次回 第39回定期演奏会のご案内

とき 2015年6月7日(日) ところ 宮前市民館大ホール

指揮：田中一嘉

ワーグナー／歌劇「リエンツィ」序曲

エルガー／チェロ協奏曲 プラムス／交響曲第4番

※案内のご希望は、本日のアンケートにその旨ご記入ください。またはホームページをご覧ください

宮前フィルハーモニー交響楽団

◎企画・制作…大久保貴子 重松 貴子

◎撮影…櫻井 将雅

◎デザイン・印刷…八幡印刷株式会社